東京句会自由吟　鑑賞 201009　松橋帆波

絆から忍に変わって一つ屋根

「絆」と「忍」漢字の持つ派生的な意味を利用した対比。偏の同じ字を用いる手法もある。例えば「絶」「細」「糾」「終」「網」「縄」「縛」「縋」句意と違ってくるものもあるが参考まで。

古ぼけた写真に歴史こぼれでる

人、地域、国、それぞれに歴史があり、歴史には都合の良いもの、悪いものがある。過去の瞬間を切り取る写真。そこには不都合な歴史が切り取られている事もあるし、知られていなかった真実が埋もれていることもある。

スキだったこともやんわり忘れてる

「ホット」な感情まで忘れてしまうとは哀しい。加えて「やんわり」という表現が切なさを生んでいる。

猛暑バテいや体重は増えている

暑さにバテているように見えて体重は増えている。という事象のイメージ、また時事的な事柄が見えなかった、バテと体重増の対比だけではないと思うが。

爺ちゃんはタバコ臭いしだっこ嫌

既視感が強い。髭が痛いという着想もある。時事として煙草の大幅値上げに対する、禁煙の理由探しと読むと面白いが。

仲間よと心の疵にふれてくる

人はみなそれぞれの人生を歩み、それぞれの事情を抱いている。「うちも同じよ」「私も同じ」という言葉は、時として同族意識の押し売りとなり、知らないうちに他人を傷つけることもあるのだ。

ゴキブリも妻もヨタヨタしてる夏

地球上で環境適応力が持つとも高い部類に入るゴキブリと奥様を並べ、彼らをもヨタヨタにする今年の猛暑、酷暑が見事に表現されている。

虫の音も抜け毛も秋を告げて居り

「虫の音」と「抜け毛」前句と比較してみたい。「抜け毛」という言葉で読み手自身をやつしているところが川柳味につながっている。

非国民にされる地デジに乗らないと

地デジ移行まで一年を切ってから、アナログテレビの画面の表示がどんどん煩くなってきた。エコポイントの終了、アンテナの工事、二台目、三台目のテレビの対応など、対応しない方が悪いかのような印象を抱かされる。停波時にどのくらいの混乱が起こるのだろうか。

三面の殺人事件胸痛め

既視感の強い作品。具体的な事象が見えればよかった。

今日も夏茹だる日止まぬ明日も夏

受けとしての下五が上手い。いつまで続くのかという感情と、長引く猛暑が表現されている。

空きっ腹精神論をまた説かれ

あるアンケートで、エアコンは身体に悪いと考えている高齢者が 4 割に上っていることが判った。ここ数年の夏の暑さは、今までと質が変わってきている。気の持ちようでどうにかなるものではない。精神論も時代に合わせて変わっていかなければならない。

ソフトクリーム舐める溶けるの用意ドン

ソフトクリームは出来上がった時点で外気温に晒され、舐められた時点で体温に晒される。つまり生まれた時点から溶け始めているのである。

ご本人よりも巾着ものを言い

巾着という言葉から、所在不明高齢者の事か。もしくは小沢代表の支持者の事か。もう少し具体性があれば。

週刊誌買う気もなくて斜め読み

週刊誌は中吊り、新聞は見出し。それだけで世論なるものが形成されるかのようだ。活字離れを言われるが、読み手だけの問題ではなかろう。

ムラサキで埋める約束した柩

ムラサキの必然性は、死者と、そして約束を交わした残された者たちだけが知る。それは読者には見えない。読み手は「ムラサキ」を自分の世界の何かと置き換えて作品を鑑賞する事となる。「読み」を考える場合の一助になる作品。

居酒屋の隅で言葉のゴミ拾う

「ゴミ」は言葉を吐いた者の視点。作者の視点からは「ゴミ」は「宝石」かも知れない。「彩と逢う」「玉手箱」など色々と考えてみたい。

猛暑です今日も予報士歯切れよい

予報氏はきっと気象マニアなのだろう。今までにない気象状況に嬉しさを隠せないのかもしれない。

またひとり戦友が消えてく秋彼岸

既視感の強い作品だが、戦後 65 年、日本以外の国ではどうだろうと考えさせられる。65 年経ってこのような感情を抱ける世代がいる国がどのくらいあるだろうか。

おころりよ背負った子供の顔が無い

かつて子供は社会の宝だった。国の未来の希望だった。様々なツケを未来の子供たちに背負わせる政治。顔が無いのではなく、子供たちの顔が見えていないのかも知れない。

靴ひもを結び直すが素寒貧

職のない暮らし、または、収入の少ない状況。啄木の「じっと手を見る」につながる感情か。

待ち合わせケータイ耳に探し合う

街のランドマークなるものの印象が薄れたのは、ケータイ

の普及だと思っている。かろうじて澁谷のハチ公とモアイは頑張っているが。

ミステリー所在不明の高齢者

「ミステリー」と言ってしまったところが惜しい。例えば「空蝉や」「預金帳」など色々考えて見たい。

支持率というマスコミの塗り絵たち

ここ数年の世論調査報道を見ていると「支持する」「支持しない」の二択のような気がしてしまう。選択肢はもっとあって然るべきなのに。

本音から二センチずらす推薦書

二センチというのが、大きいのか少ないのか、そこが読み手によって別れるところだろう。

新聞もカタカナだらけ辞書が杖

最近のカタカナ語は和製英語にすらなっていないし比喩的でもない。アルファベットを適当にローマ字読みしただけで、深い意味など同でも良いかのようだ。

無事であれ祈る月夜の救急車

雨のほとんど降らない東京の猛暑。月夜がそれを連想させる。上五は他者を思いやると同時に、自身への注意喚起でもある。

豪快な笑いで下がる女っぷり

下五が発見。女性と男性との世間の見方への穿ち。

灰皿を割った三度目の禁煙

三度目というのが「二度あることは三度ある」から簡単にできない禁煙を表しているのか、増税が続くことの意味なのか、いずれにしても灰皿を割っても又買ってきてしまうのが人間である。

「猛暑日をなくそう党」を立ち上げる

これだけ政治が目先の事に汲々しているのを見ると、期間限定の政党があっても良いかも知れない。

正論を今も信じる古い傷

普遍的な「正義」というものが存在するのかどうか。それは単なる「青い鳥」ではないのか。変わることができないものは、多くを周りのせいにする癖がある。イデオロギーも然り。

八日目を生きても蝉は鳴いている

蝉は七年を地下で生き、羽化して七日で死ぬといわれる。だとしたら八日目も生きている蝉はなんと孤独だろうか。同じ日に羽化した蝉はみな死んでしまっているのだから。